巻頭言

2007年問題の波紋

江原（えはら）　由美子（ゆみこ）

2007年の新年を迎えた。いよいよ「2007年問題」が現実になる。1947年から1949年生まれの団塊世代の人々が、今年から３年の間に60歳を迎える。職場では、ベテラン社員が大量に退職してしまい、人手不足・ノウハウ後継者不足が生じる不安がある。地域や家庭では、団塊世代の定年退職者に、会社以外の居場所を与えられるのかという不安がある。また各地域には、仕事を辞めた団塊世代が都市部から地域に戻るのではないかという期待もある。これが「2007年問題」だ。そこで多くの自治体が「地域・家庭」に団塊世代を呼び戻そうと、さまざまなプログラムを準備しているという。

家族意識という観点から見ると、団塊世代は、ニューファミリーという言葉に象徴される新しい対等な友達家族関係を生みだした世代である。しかし、団塊世代は明確な性別役割分業家族が多い。意識と実生活の乖離に引き裂かれた世代なのだ。その仕事人間だった団塊世代の男性が、退職によって「地域や家庭に帰ってくる」。このことは、男女共同参画社会を形成するうえで、基本的によいことだと思う。

だが、夫の定年退職後の生活を楽しみにしている人の比率は、夫が85％なのに対して妻は60％であり、40％の妻は、「夫の定年は憂鬱」と考えているという（博報堂、2004年「団塊世代の夫と妻の定年に対する意識調査」）。夫と妻の意識差は意外に大きいのだ。そもそも妻の側からすれば、「これまで会社一筋だったが、今後は地域・家庭に戻る」というような問題のとらえ方自体に、既に違和感があるのではなかろうか。なぜこれまでかかわらないでいたのか、なぜそうできたのかをこそ、省みてほしいと思っているのではなかろうか。妻とのコミュニケーションも、「地域・家庭」に向かいあうことも、そこから出発するしかないのだと思う。

■プロフィール　1952年生まれ。社会学者。首都大学東京教授。1985年社会学理論を基に具体的な日常生活の中で諸個人間の対立や葛藤として出現してくるジェンダー問題・女性問題を、相互行為過程として理論化。日本社会学会・日本女性学会会員。著書に『女性解放という思想』『フェミニズムと権力作用』『ラディカル・フェミニズム再興』『装置としての性支配』『フェミニズムの主張』『性の商品化』『生殖技術とジェンダー』『ジェンダー秩序』（いずれも勁草書房）など。